

2023年度 藝大研修

奈良県立香芝高等学校 宇野 真理歩
 奈良県立高円芸術高等学校 橋田 真季

○期間：令和5年8月8日(火) リモート研修

菌部秀徳先生の「日本の木工・継ぎ手と仕口」の講義では、神社などの建造物において、年代ごとに技術や目的に合わせて変化がみられることが示された。特に格子について構造的でありながら、意匠性、採光性に優れ、空間的な調和を生み出しているということを学んだ。また、道具について、現代でもサイズなどのバリエーションは求められるが形自体への注文はほとんどないのは、機能性を果たしつつも造形的に受け入れられる形として完成されていて、その考え方が連綿と続いているという内容が印象的だった。また、本研修で用いる木材について上野校地内で入手したヒマラヤ杉を利用するということが紹介され、ウォールナットなどの目新しい外材ではなく、身近な素材を活かす方法を考察する機会として本研修の方向性が示された。



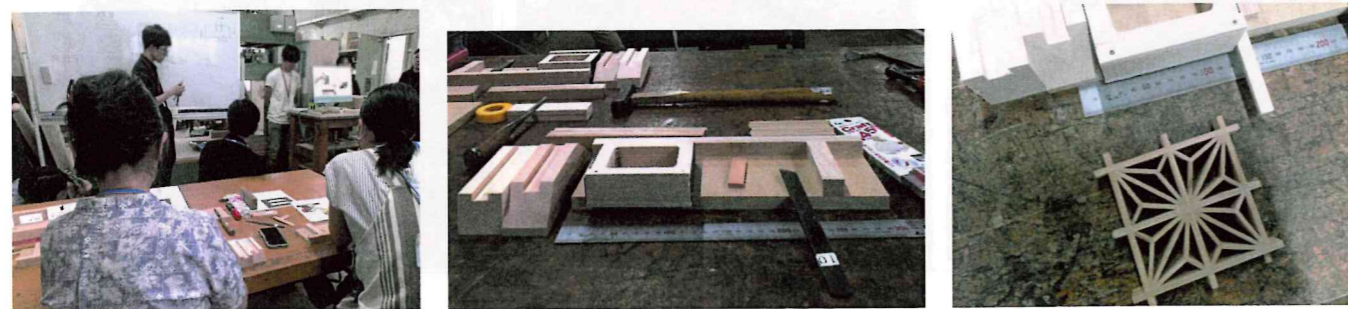
時代ごとの梁の形状の比較 左：飛鳥時代 右：鎌倉時代

様々なサイズの鑿（基本的な形は同じ）

○期間：令和5年8月9日(水) 実技研修

2日目の「日本の木工・組子」の実技研修は、東京藝術大学取手校地の木材共通工房で行われた。ヒマラヤスギを材料に組子「角麻の葉」のパーツ製作から組み立てまでの流れを通して学んだ。今回の研修にあたり、直角治具と組子治具の用意があった。これは、基礎となる「地組み」の溝彫りや、内側にはめこんでいく「葉組子」での角度削りなどでの作業で大いに手助けになると感じた。「治具があることで、繊細で難しい作業が苦手な生徒でも出来るようになるのでは？」ということで今回考案されたそうで、木工の作業での取組みを深く学びとることができ、その工程に補助道具があれば精巧な作業にも経験が少なくとも制作可能になるということを知ることができた。

2日の研修を終えて、工芸の奥深さを知り、改めて教える上で「出来るために何が必要か」を考える機会となった。また、木のフシや削って出る木クズ、樹の薫りなどにも素材の面白さを発見でき、愛着のもてる作品になった。



工房の様子

治具等使用した道具

完成した「角麻の葉」の組木

2024年度 藝大研修

奈良県立高円芸術高等学校 教諭 北村 詩穂

期間：令和6年8月7日(水)

午前：講義、蒔絵（下塗り→銀蒔きまで） 午後：墨流し（マスキング→墨流し→錫粉蒔き）

○蒔絵：下塗り

箸はマラス材に MR 漆で仕上げられたものを利用する。細い筆に漆を付けて箸に模様を引いていく。筆は本来「本ねじがわり」というネズミの毛で作られた筆を使うそうだが今回はナイロンの筆で代用した。漆は箸と同じ漆を使うとより食いつきがよいそうだが、今回は銀蒔きで上げるため、銀の色が映えやすい白漆を使用した。

箸に塗る前にリグロインで拭いた。油の上に漆を置くと乾かなくなるためである。リグロインは制作中の漆の線を消すときにも使う。揮発性が高く、作業がスムーズに進むというメリットがあるが体に悪いのでエタノールやテレピンオイル等で代用されることが多い。

漆は薄すぎても厚く塗りすぎてもいけない。厚く塗ると縮んでしまったり、銀粉が沈んでしまったりする。厚く塗ってしまったときはコピー用紙を重ねて余計な部分を取る。

○蒔絵：銀蒔き

銀粉は2号粉を使用。真綿で優しく載せる。真綿は一本でつながっており毛羽立ちがないため作業に適している。漆が厚い場合は銀粉が沈むため2、3分後にもう一度銀を蒔く。

蒔き終わると湿度 80%ほどに固定された木製の湿し風呂に入れる。漆は水分と酸素に反応して固まるため早く固まる。湿し風呂がない場合は段ボールの内側にビニールを貼り、絞った雑巾を入れ湿度を上げ、雑巾に直接触れないように箸を乾かす方法などでも代用可能。

○墨流し：マスキング

着色したくないところにマスキングテープを貼る。バットに水を張り、色漆をテレピンで溶いたものを垂らすとマーブリングのように色漆が浮くので、それをそっと箸に乗せることで墨流しができる。テレピンが少ないと漆が沈むので、混ぜたヘラからポトポトと落ちるくらいの粘度に調節する。

今回は墨流しの下地に白漆を化粧パフで乗せた。このようにするとステンシルのようになる。墨流しで使った藍色の発色がよくなる効果を狙った。墨流し等が終わると錫粉を蒔いた。銀粉よりも金属感が強い仕上がりになる。

期間：令和6年8月8日(木)

午前：粉固め、講義、色漆で加筆（墨流し） 午後：銀粉磨き、色漆で加筆（蒔絵）、講義

